

赤間関硯（その3） 図案について（I）

堀 尾 昇 平

はじめに

前回2回にわたって「歴史」「道具と製法」を述べてきたが、今回は図案について述べてみたいと思う。

「図案」。硯のデザインのことであるが、ある程度、制約もあるようである。

硯の図案集で最も有名なものは、江戸時代に刊行された「和漢研譜」であろう。この本は3巻からなり、国内、中国の主な硯を図案化し図で示したもので、このあと、それを越えるものは今だに見うけられないという。現在も、硯工達の中で愛読され、研究されている。しかし、それにもものたりずに自分で図案を生み出した人達もいる。

硯の形といえば四角に面取りされた角物といわれる硯を一般的に思い浮かべるが、赤間関硯の原石は、「その2」で述べた通りねばりがあり、石を割ると皿状に割れ大きく割れることがないため昔から彫刻物が多く作られたといわれている。これら、いろいろな図案を表しながら、その技術や図案の成り立ち、名工といわれた人達の作風とその特徴などを表してみたいと思う。なお下関美術館・長府博物館・故堀尾卓司・堀尾信夫の資料提供ならびに取材協力に対して感謝する次第である。

古研図案について

赤間関硯（その1）で歴史について述べたが、硯は古来、陶製であった。

奈良時代の出土品は、円硯（円のように丸くふちどった硯）に始まり長方硯にうつっていくという。その代表的なものとして正倉院の御物「青班石陶硯」が上げられる。これは六角の青い班石の中に風字硯（硯を風の字にたとえた所からこの名がある。）がはめ込んであるという。これは手前にふちが見られないという。

堀尾卓司（以下、卓司とする）は、この頃の硯の形を次のように書いている。「円硯の海のふちは墨をする陸の部分より低い。それが、段々にふちが高くなり、陸は逆に低くなる。また足がついていたものがなくなっていく。長方硯は前にかたむいてくる。手前に足がついていて、海と陸の境にもり上った土堤ができる。手前の足が時代とともに低くなり、海がへこんで水をためるようになっていく。平安時代初期の硯には手前のふちがない。手前のふちが出来上るのは平安末期である。」という。また他に、平安時代には猴膝（さるあし）研及び猿頭（くつかた）研という陶研が一般に用いられたという。法隆寺の御物硯を「古図類從」では猿面硯という名で呼んでいる。これらすべて形として猿の顔・形を図案化したものといわれ、この形は、いま

だに石硯においても斬新なデザインとして使われているものである。

前述の長方硯でも手前にふちがあるものもある。「和漢研譜」にある菅原道真の石硯、また紀州・新宮の速玉神社の御神宝である陶硯「猿面研」にもふちがある。この硯について卓司は、「蒔絵がほどこされておき、墨をする陸の面に縦横に入りみだれ重なった円弧の紋が彫られ沈金様の技術が見られる。中心あたりはすりへって模様が消えている。このざら面は、どう使われたものか。」と語る。他に遊び半分に使ったものとしか思えない陶硯があるという。それは、陸が太鼓橋のようにそっている硯で、海に近い所で墨をすればするが、他の所では手前のふちを越えてこぼれるという。

石硯は前述の菅原道真の時代を初期と考えられている。鎌倉時代には一般化していくことは「赤間関硯・1」で述べたが、形としては鎌倉の鶴岡八幡宮の御神宝は方形角硯であり、角彫である。他にも似た作品が出土しており代表的な形態であると思われる。

角彫はふちと陸の面が接する所が角であることからこの名があるという。ここが丸になると丸彫りになると聞く。

角彫は石硯の基本とされている。卓司によれば「角物に始まり角物に終わる」という。角物とは、長方形や四角形の硯のことである。彫り始めは下手な角物を作り、最高級の職人は無地物で変化のない形の中に美しさをたたえた硯を作り出したという。同じ様式だが、大きな違いがあるという。

赤間関の硯工達はどのような仕事をしたのであろうか、次で考えてみることにする。

赤間関硯図案について

まず、赤間関の硯の彫り方、色など非常に似ているが、銘もなく確証がないため現在では赤間関硯の初期のものとして認められていない作品を紹介する。それは「赤間関硯・1」にもふれ、前述もしたが、鎌倉の鶴岡八幡宮の御神宝といわれる「菊籬蒔絵硯筥」の中の硯である。この硯は、巾3寸2分5厘、長さ4寸8分2厘、厚さ7分2厘の方形角硯（風字硯であるともいわれる。）であり、硯のふちに金箔をおき、ふちから3分下まで側面四方にはく置きがある。又、宝物殿にある政子の方愛用の「呉竹硯」（松に梅に唐人高彫り）は図を高く浮き上らせて高低をつけている。（8分ぐらいの差がある。）

御神宝は後白河法皇より頼朝公が拜領したものとされる。卓司が見る機会を得た時には、その作りのみごときは、すばらしいものであったことを後述している。

赤間関の石の特徴は前述のように風化に強く、ねばりがあり彫刻に向いている為、代々、名工が出て独自の作風を作ってきた。

赤間関硯の名家として大森家がある。その中でも頼澄を忘れてはならない。

大森土佐守頼澄

大森家譜によると大森家三代目（元和年間（1600年代））になる。頼澄が「竜門の硯」を朝

廷に奉献したことは「赤間関硯・1」で述べたが、その名工の作の小さな丸硯（直径3寸5分ぐらいのもの）は、あざやかなむねや、海の彫り、ふちづくりなど、品のよい作品でいまでも日に浮かぶと卓司は語る。

他に「赤間関硯・1」の中で図で紹介した、八角硯、円硯など多彩な形が多く作られている。明治以後はどのような職人がいて、作品をのこしたのだろうか。名人といわれた人達を上げてみることにする。

大森狂泉堂

大森家初代・芳清から十代目までが直系で、その弟子として育った父・頼寿が大森家を相続し玉池軒初代となる。大森太郎次郎頼寿の長男。

王司町・玉池軒二代目、本名・頼藏。弘化4年5月21日生まれ、大正15年12月、80才で逝去。墓は仲之町、引接寺にある。

玉池軒が献上品を受けあえば必ず彼が仕事をしたという。

大正15年、80才で「松研」を献上する。卓司が初めて見せてもらった硯も松研だったという。老松の形で表から裏につづいており、頭の部分で幹は枝となり、小枝をしげらせ、葉をかざり、折りまげてたれさがる枝、それをくりぬき浮き上らせるなど精巧な彫りは品がよく、見てあきさせなかったという。

松の図案は数をかぞえたということは得意なものの一つであったと思われる。その他、梅・竹・蓮・芭蕉・白菜等、数多くの作品を残している。

狂泉堂の作品の中にも次のようなものもある。

凸凹のはげしい彫りが全面をおおっている角硯の裏に彫られた、くわいは根っ子が浮き上がって指で押すとこわれそうであったが、まわりを分厚いふちが守っていたという。このくりぬき細工はあぶなく見えたという。

松部十蔵

弘化2年2月9日、豊浦郡神田上村、磯部金蔵の四男として生まれた。文久2年（1862）2月、長府宮の前の松部に養嗣として入家し、大正8年（1919）5月26日、75才で逝去した。

彼は角物硯の名人であったという。狂泉堂のような華やかさはないが、あざやかなのみの切れあじは深くあじあわせるものがあり、石材は紫金石を多く使ったという。

伊予吉事巾島玉寿堂（店銘・藤原英信）の硯工の1人として働いていた。彼の代表作として水吐き龍が彫ってある「夢相硯」という名の硯があったという。作銘は藤原正清と彫っている。

卓司が、かたみとしてもらった硯のことを次のように書き表している。「大きさは、一尺の長さにも巾7寸位、あし付で硯箱が作ってあった。足が5分ばかり四方に張り出して猫足になっている。裏には足だけで何も彫っていない。蓋は無地で、いんろう蓋である。いんろうの合わせ口は2分厚みで、まるで板を張り合わせたように裏は同じ厚さでくられていた。箱の方も蓋

と同様に、角は角彫で、蓋の方にも身のがわにものみあとが手にさわるのに、合わせ口に四すみを合わせると、すっとすい込まれる様に合わさって音をさせなかった。箱の中は全部取りはずしになっていて筆架が作ってあり、硯をはさんで上下に切れていた。上の部には、水滴をのせる小さな楕円が彫ってあり、水滴がのっていた。小形の硯が、わく組の中に納めてあったが、糸ぶちでよくくられて陸も深めで海もあざやかなむねを描いて深かった。中は丸彫（すみ丸く彫られている）になっていた。小さな硯がはまることによって上下の筆架は少しも動かなかった。今でも品のよい角彫を思い出す美しい硯だった。」と後述している。

また十歳の逸話として「自分の硯を出して、石蓋と硯の身をもってそっと廻すと、くると回って開くと、『ぽかっ』と小さな音がした。」と卓司は語る。

彼は、ふたの合わせ口や、角物のすみの彫りが木の組み合わせをみるように正確のみあと、などが得意だったという。他にローソク立てや重箱なども彫っていたという。

崎川羊堂

明治33年宮崎県延岡に生まれる。大正15年下関に来て職人として働き、他各地で仕事をして戦後故郷に帰り昭和39年64才で逝去した。

彼は昭和の初期、下関の職人達に多大な影響を与えた人物であり、卓司の師匠でもあった。

羊堂の師匠は原口梅羊といい、梅羊の師匠を内海羊石という。羊石は明治・大正期の硯の三大名人の1人だったという。

羊堂の仕事ぶりについて卓司は次のように表わしている。「大正15年の春、ぶらりと私の店にやって来て硯を作らせてくれと云い、仕事台につくと、その日のうちに向うぶちに竜を一びき彫り上げた。彫り上った竜は今まで見た、どの職人よりもあざやかだった。」という。そして職人として雇われ仕事を始め、若い卓司を指導した。

他に珥泉堂の弟子で吉田の名人といわれた木村華山などがある。

以上が下関で活躍し、職人達に影響を与えた主な人達である。

山元（硯石材を掘り出す地元）の硯職人達にも名人といわれた人達がいた。

吉村吉右エ門（号・陽山）

昭和27年72才で逝去した。明治から昭和の初めにかけて活躍した。陽山は彫刻が得意であった。町の議員になったぐらい人望があったという。

日下健一（号・研堂）

陽山の弟子で仕事が早く、のみのあざやかさをほこっていたという。物産展などでたびたび受賞したという。昭和53年72才で逝去した。

他に伊藤喜兵次・磯部熊一・磯部徳次郎・伊藤孫太郎・矢原亀松・伊藤助五郎などがいたという。

また、明治中期以前には、今の厚狭地方の奥地に「よもきょうしょう」という農業の片手間

に硯を彫って暮していた人達がいたという。現在は一軒の家もないという。

「よもぎょうしょう」の人達が考え出したのは、水に浮く硯である。意味はないのだが、技術は大変むつかしかったことは想像出来る。それを競って作ったという。腕自慢が多くいたことがよくわかる逸話である。

次に、現代の硯工について考えてみることにする。

堀尾卓司

明治43年2月王司町に堀尾坂次郎の次男として生まれる。16才より硯を彫りはじめる。硯屋3代目である。卓司が、制作し販売するのは初代になる。それまでは職人の作成したものを販売していた。

文展・日展・現代工芸・新日本工芸などに出品するなど、彫硯の芸術性を追求し赤間関硯に新風を吹き込んだ人物として有名となる。昭和61年5月、76才で逝去した。

作り始めたのは昭和2年からである。店の職人として、前述の崎川羊堂がおり、彼から手ほどきを受けた。この頃は日に平四五（2寸五分×4寸5分×7分）を10面作るのが職人の日安になっていた。まだ作り始める前の話であるが前述の大森珥泉堂が関東大震災で帰ってから、少年であった卓司を呼び硯の話をよく聞かされ、それがあとになって非常に役に立ったと卓司は言う。そのためか、他の職人のような修業はしなかったようである。そのかわり、いろいろな勉強をする。それは、どうしたら師匠を抜くことができるか、ということのためである。

彼は、硯にない技法、日本画では近すぎると考えた。それは目ぼしい硯工は、日本画や水墨画をかくからであったという。

まず油絵を勉強するために研究所に入り3年間石膏デッサンなどをする。その後、昭和15年に東京美術学校の工芸講師・江島信一に出会い、彫刻家・新田藤太郎を紹介され半年間彫刻の勉強をする。この時期、ドイツでバウハウス運動（デザイン教育・造形教育の系統化で教育革命といわれる。）が起り、この洗礼を受け、形態の単純化にあこがれ、写実具象・心象・抽象へと変っていく。

しかし、最初に抽象について考えさせた人物は大森珥泉堂翁である。卓司は、「珥泉堂が、『スミスの中がえり飛行を見た時、これを硯にのせること（図案化）が出来ないかと考えた。自分は出来ないが、お前がやってくれるだろう。』とたのまれた。」とその時のことを話す。いかにして表現するか考えぬいて、実在工芸第3回展に無地硯で二本の線を引いたものを出品する。

それは古硯から考え出した「飛行機」を表した図案だったという。どこまでも硯でなければならないという約束はまだ守って作っていた。硯の約束は、職人達が代々築き上げたものである。

珥泉堂は「左図案」の約束ごとを彼に話す。

「左図案」とは、硯の左側に図案の重点をおくことである。硯は右側に置き右手で墨をする

のが普通である。したがって右側の図案は手にかくれて見えない。そこからこの名があるという。また、左図案にすれば墨をすりながら図案をながめ硯を楽しむことも出来る。

このような約束ごとのこだわりを、彫刻家が破ってみることをすすめる。考えたすえ、彼は「約束のない世界を考えた。気がついたのは何もない世界である。硯の場合、もとの石にもどしてやることである。のっぺらぼうの石、それは硯の祖形である。これが私を自由にするきっかけになった。」という。これが彼が死ぬまで追求した、硯を硯とだけに見ない自由な発想の原動力となったもとの考え方である。

また珣泉堂は「説明出来ないものを彫るな。」といった。彫刻ものを作る時には重要なことである。このような話がある。弟子が竹の硯を作った時、「この竹の葉はどこから出ているのか」と師匠が聞き、また「この葉は一つの葉柄から二枚出たことになり、うそである。」と言ったという。図案の通り弟子は作り、間があいたので葉を入れ加えたと思われる。それを見ぬいたのである。そして「写実の時は気をつけなさい。知って彫らないのと知らないで彫るのでは相手に訴える力に大きな開きが出る。」と師匠は教えたという。ものを見る目を養い図案だけにたよることをいしめた逸話である。

彼も前述のような事にあう。自分の師匠と同じ作名で作品を競作することになってしまった。その時買い手は自分のを持って帰ったという。これで自分の進む道が決ったという。それは一日中スケッチをし、その中ものから図案を起こすことを知ったからである。それから病いにたおれるまでいろいろなものをスケッチした。それは千枚を越えると思われる。その中から数多くの作品が生まれ好評を博した。

卓司の彫刻硯は、ふちを作らなかった。これは、硯を大きく見せるとともに、書を書くのにそれほど墨を必要としなかったこともある。したがって海も深く作らなかった。これは古硯に通じるという。また、ふちを作ると案外墨を外にこぼす人も多く見られる。これは、ふちがあるため、墨をする時に注意をしないためであると考えられる。しかし、その硯も、堀尾しか作っておらず特異な硯としてあつかわれている。

赤間関硯を全国に広めた功績は高く評価されているが、書家の間には今だに赤間関硯が評価されずにいることに對し残念であったようすであった。

堀尾信夫

昭和18年5月生まれ、卓司の次男として生まれる。大学卒業後、父卓司について修業。古硯を研究。日本工芸会正会員。

杉山栄

大正14年11月生まれ。昭和61年7月急逝去した。62才。国鉄を退職後、下井唯石に師事。日本工芸会正会員。他の石にも興味をもって積極的に研究していた。

下井唯石

昭和11年3月生まれ。堀尾卓司に師事。山元の職人として活躍。日本工芸会正会員。

日枝敏夫

昭和21年10月生まれ。山元の職人として代々硯を作ってきた。現在の職人達の中で一番若い。日本工芸会正会員。

以上現在活躍している4人を上げておく。彼らの作品は伝統的な図案の中に新しい考えを取り入れたものを作り上げつつあり、各個性を出し始めている。

まとめ

今回は、赤間関硯の図案ということでさがしたが、堀尾卓司の著作以外には見あたらず、一方的な見方になった可能性が多いことはさげられない。

赤間関硯だけを上げてみると、他にない特徴が浮かび上がってくる。それは前にも述べたが、他の国産硯よりも彫刻ものが多く見られることである。赤間関硯の彫刻ものといえば蓋付硯をすぐに思い浮かべるほど多く出回っている。今でも多く作り出され売れているものである。また、普通の硯でも回りを自然石のようにたたき、野面積み（城などの石垣のように、いろいろな石を持って積み上げる方法）の名から、野面硯といわれるものも多い。したがって面取りしたような硯は現代の赤間関硯の作風からいえば少数派になり、展覧会出品作品ぐらいにしか見ることができなくなっている。また、赤間関硯の主な硯の寸法は、黄金分割の比率で作られていることは案外知られていない。

以上図案について書いてきたが、職人個人についてのことを多く書いたため焦点が少しずれたかもしれない。硯の約束ごとについても、赤間関硯にだけあるのだろうか。次回には、国内産の硯と、中国古硯の図案とを見くらべ、その変化について考えてみたいと思う。

〔引用文献及び参考文献〕

- ・鳥羽希聰（寛政7年）：和漢研譜
- ・堀尾卓司（1981）
：赤間関硯、郷土第27集・下関郷土会
- ・堀尾卓司（1982）
：赤間関硯、郷土第28集・下関郷土会
- ・堀尾昇平（1983）
：赤間関硯。1 赤間関硯の歴史・山口短期大学研究紀要第5号

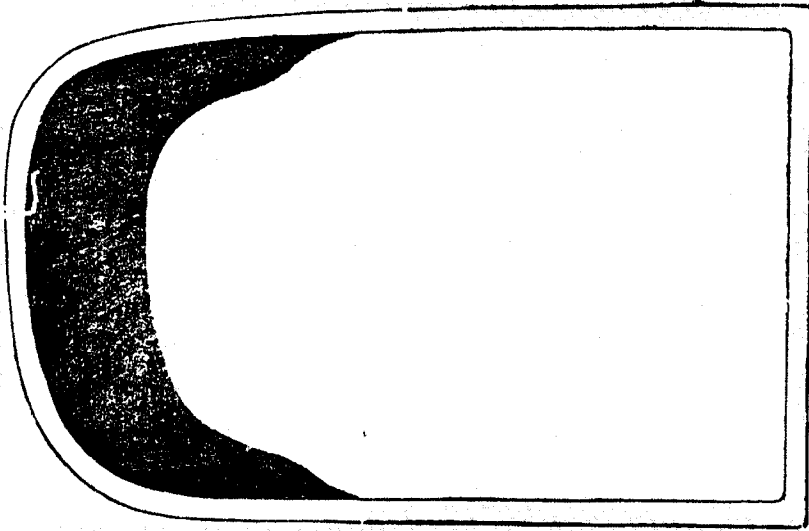
資料1 和漢研譜第2巻より

陶硯及び石硯の古来からの図案集の内、代表的な図案2種類

1-1. 風字硯

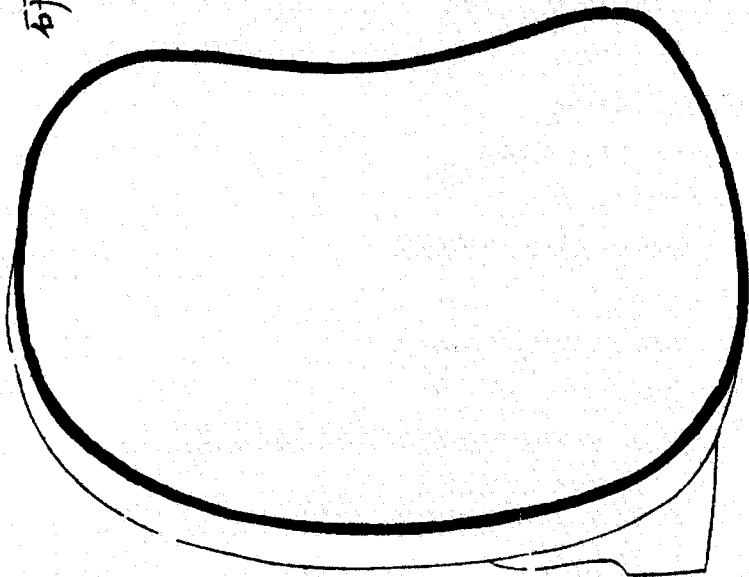
1-2. 猿面硯

風
字
硯



大如圖石

猿
面
硯

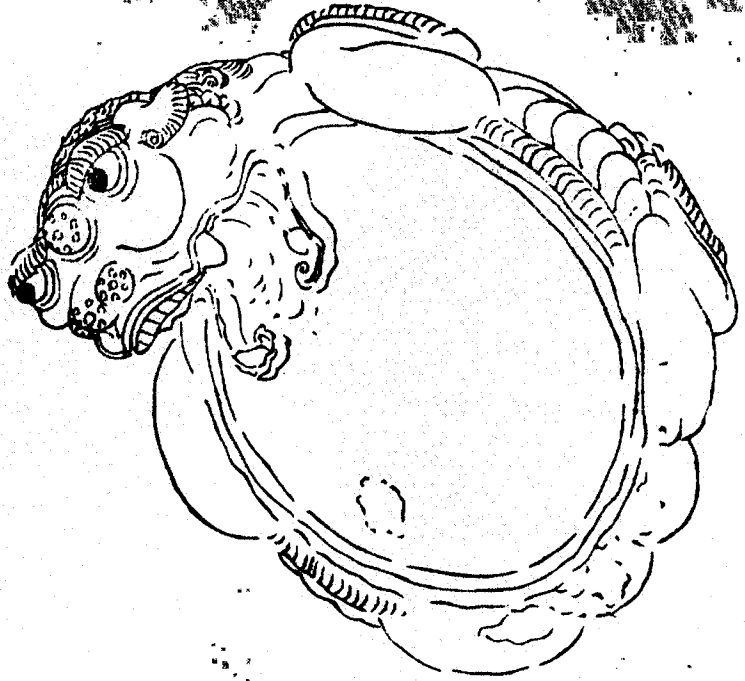


黒石每以
功安墨長五
寸五分潤四
寸厚四分前
面高七分

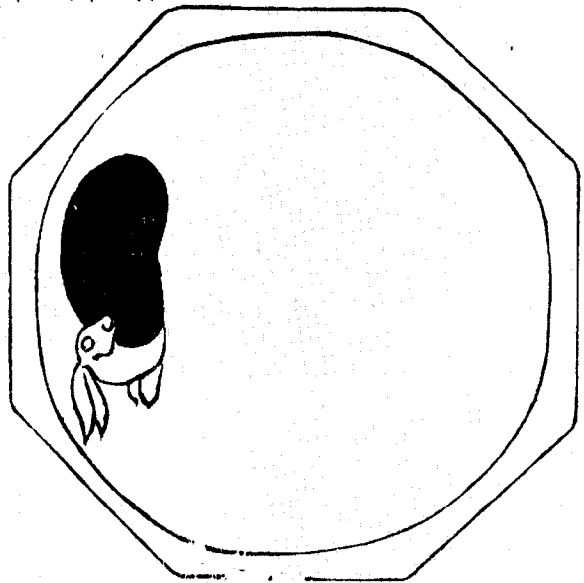
1-3 陶研1種

1-4 八稜研(千利休藏) 赤間関硯にも同種がある。(赤間関硯I歴史・資料4、室町時代)

獅子陶研



八稜研 千利休居士藏

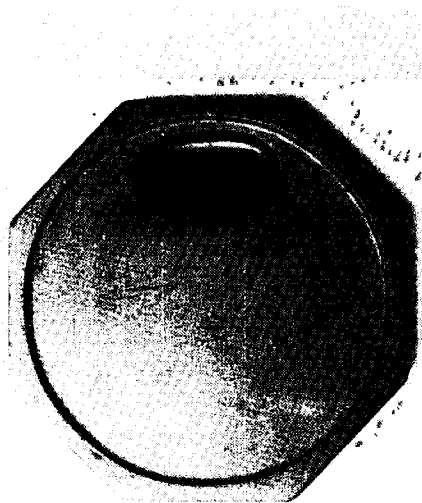


黒石大如圖

資料2 赤間関硯・写真

2-1 銘天下一大森土佐守 (長府博物館蔵)

表

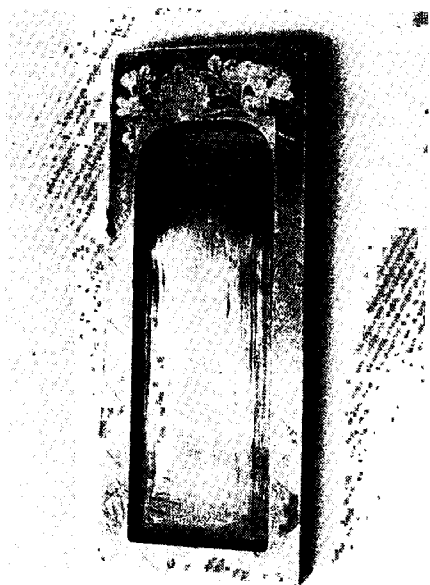


裏



2-2 銘大森土佐守 (長府博物館蔵)

表

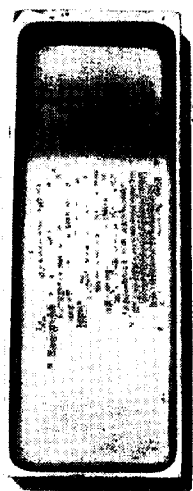


裏

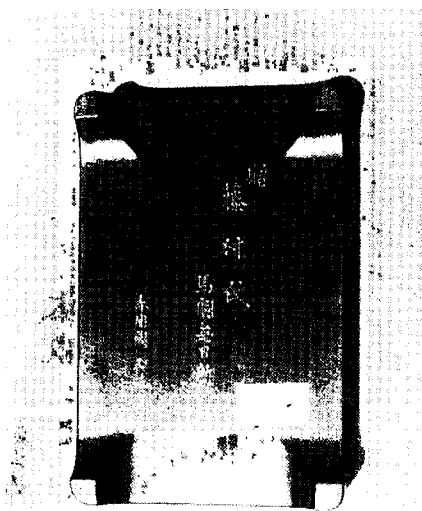
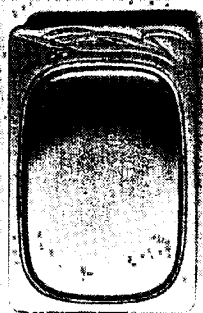


(多少仕事が荒い。職人の仕事?) 明治以後、職人達も「土佐守」の銘を入れた。

2-3 銘・赤間関唐戸橋西住、大原惟定子保父（長府博物館蔵）



2-4 「蓋物」銘赤間関 玉池軒製（長府博物館蔵）



2-5 銘赤間関住 大森上佐守 (長府博物館蔵)

表

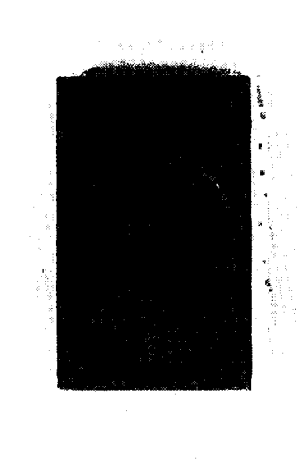


裏

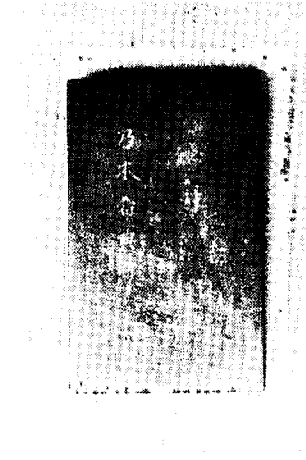


2-6 三吉慎蔵作 乃木希典大将愛用の硯 (長府博物館蔵)

表

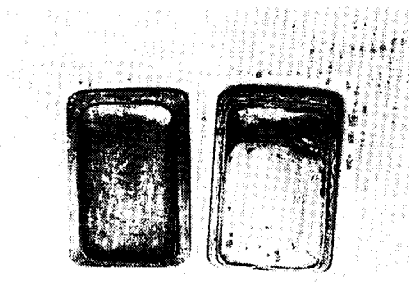


裏



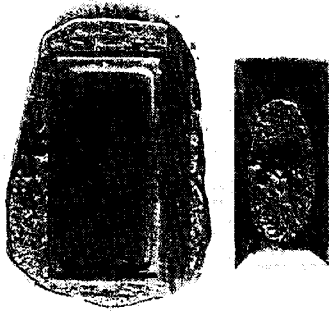
2-7 高杉晋作愛用の道中硯といわれるもの (蓋は木製) 5×7cmぐらいのもの

(長府博物館蔵)

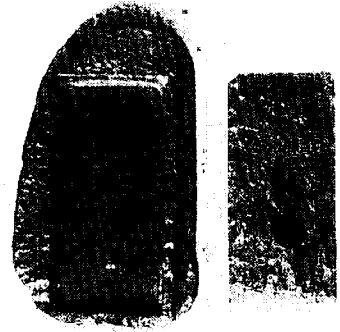


・職人芸のいろいろ（蓋物）（銘はない）

2-8 蓋物 うめ



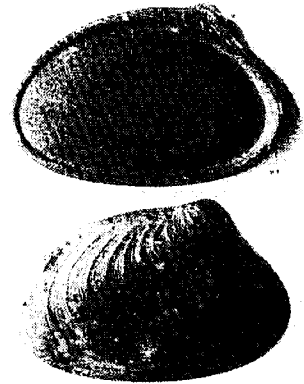
2-9 蓋物 葉



2-10 蓋物 ぶどう



2-11 蓋物 貝研

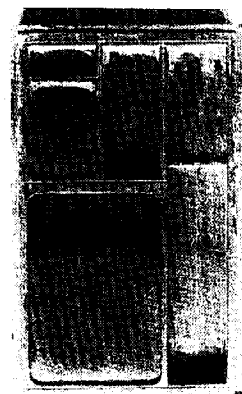


2-12 硯箱

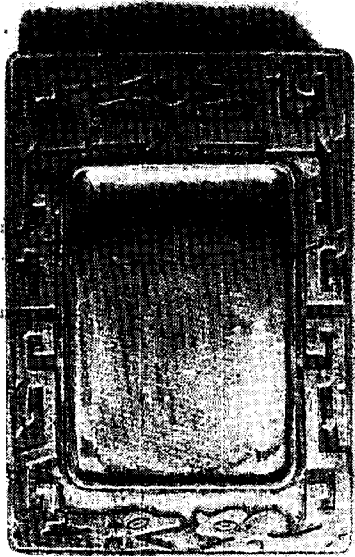
表



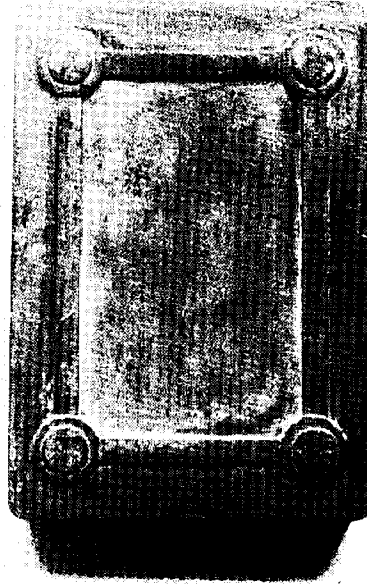
中（右側筆おき）



2-13 職人作に店名が入ったもの(青石)銘. 下関市東南部町 堀尾直司作
表



裏

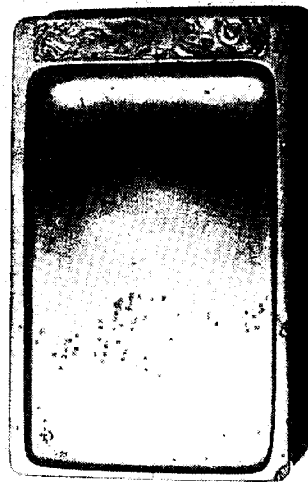


堀尾卓司の作品

2-14 卓司唯一の蓋物(波)未完成
(以後作っていない)



2-15 卓司作り始めて三カ月の角物
(1927年)(長府博物館蔵)



2-16 波招子研 (1929年)

妹の結婚祝に送ったもの

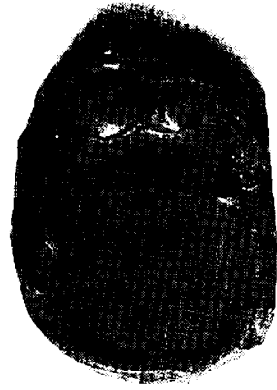
(長府博物館蔵)

※この時にはすでにふちにこだわら
なくなっている。



2-17 寿桃研

(ももの花とももの実が同時についている。)



2-19 豊艶 (1959年) (山口県立博物館蔵)

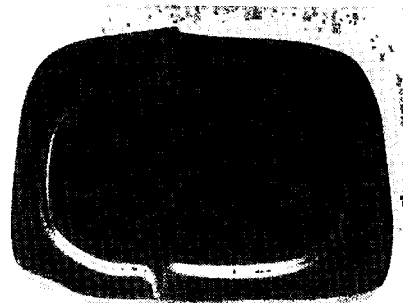


2-18 石斧研 (1959年) (長府博物館蔵)



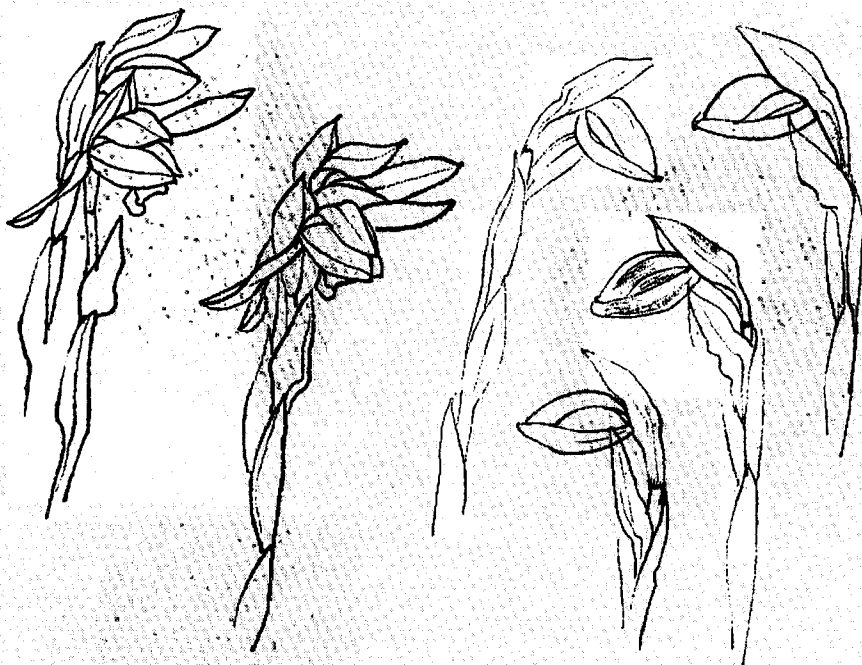
2-20 果 (1979年) 第11回日展出品

(下関市立美術館蔵)



堀尾卓司 資料3 デッサン及び図案

3-1 蘭のデッサン 1956年



3-2 花びら (石の上にデッサンをのせた所)

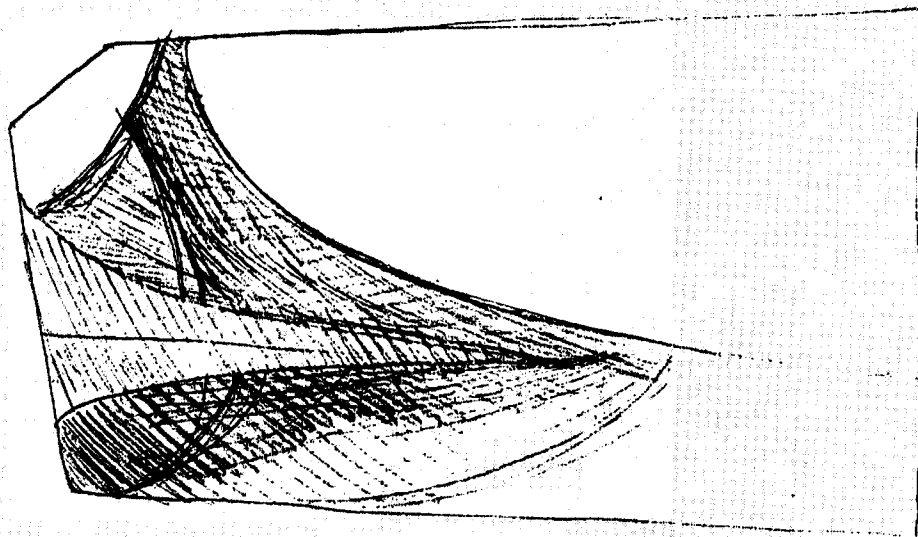


3-3 蘭花研 完成品

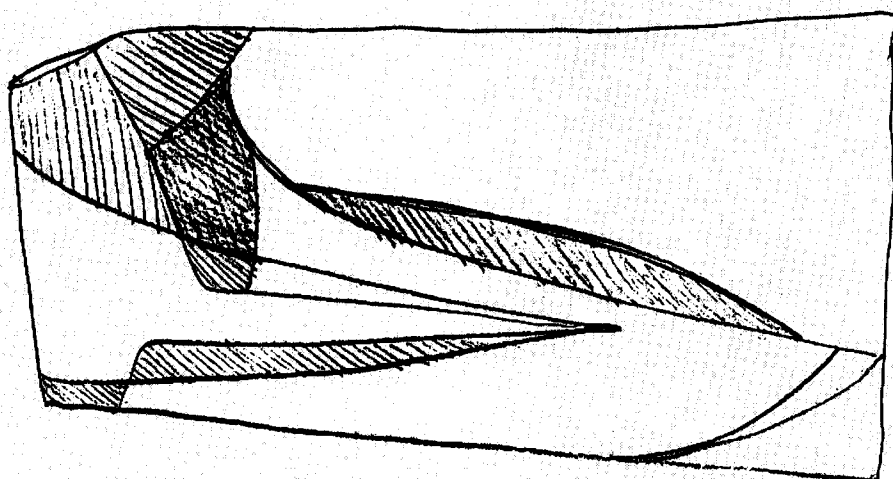


展覧会出品作ラフデッサン（1～40）題「顔」

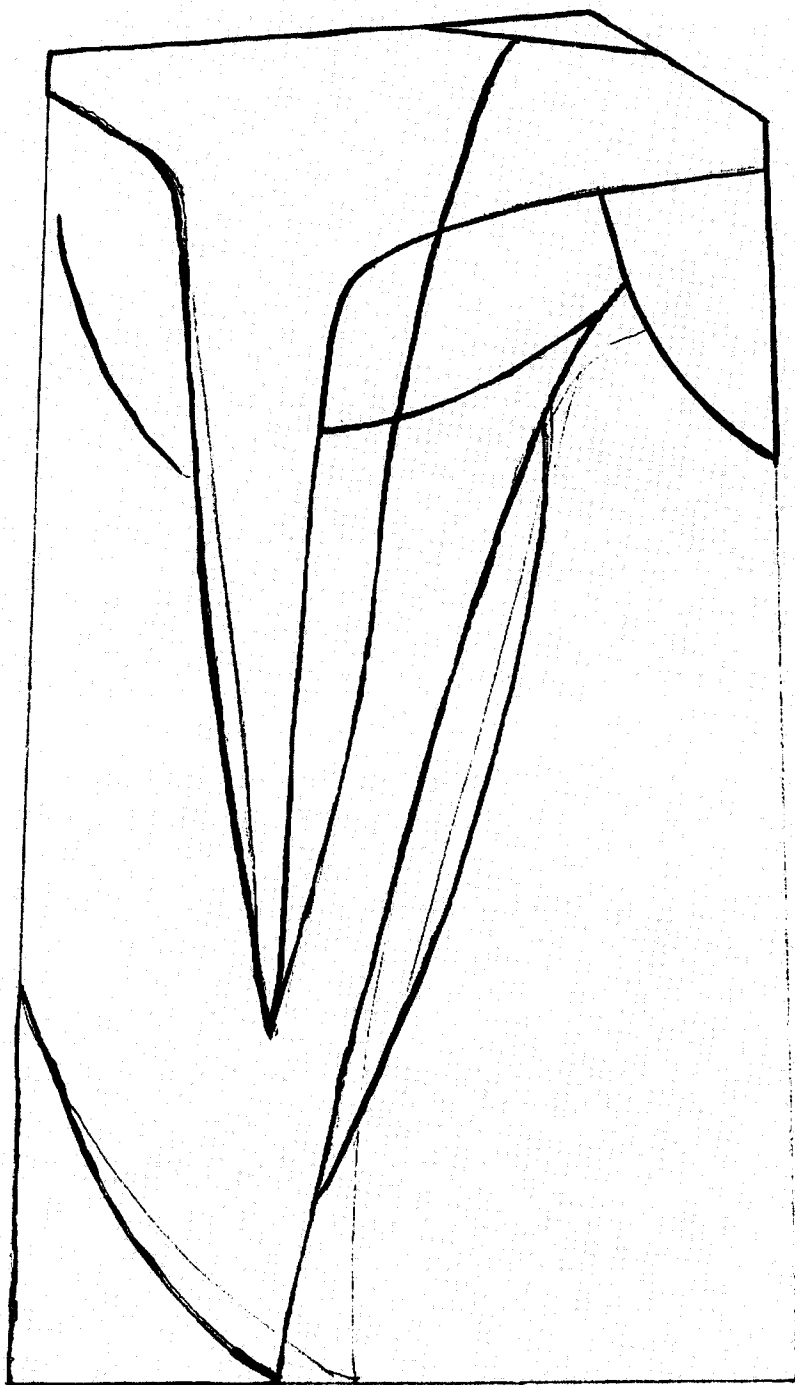
3-4 デッサン1枚目



3-5 デッサン29枚目



3-6 「顔」決定図案



3-7 「顔」石にうつすための設計図

